

聖書：ダニエル 6：1～28

説教題：獅子から救う

日時：2014年12月28日

前の章でバビロンの国は滅び、代わってメディア人ダリヨスがこの国を受け継ぎました。エルサレムを陥落させ、南ユダをこの地へ捕囚した世界帝国があっけなく次の国に取って代わられました。この6章初めの部分に見るのは、その新しい国でもダニエルは大臣として仕えていたということです。彼はネブカデネザル王の時、少年時代に捕虜としてこの地に連れて来られて以来、尊く用いられて来ましたが、老境においてもなお重要な務めを担っていました。ダリヨスは全国に任地を持つ120人の太守の上に3人の大臣を立てましたが、その一人がダニエルでした。しかも3節によると、彼は他の大臣や太守よりもきわだって優れていて、王は彼に全国を治めさせようと思ったとあります。異教社会でもこのような信頼を勝ち取り、長い間、仕えたダニエルの姿は私たちにとってチャレンジです。私たちは主を後回しにしてこの世の王に仕えることはできませんが、そうでない限り、自分が置かれている国の祝福のために仕えて、天の父があがめられるようにしなさいと言われていています。

しかしこのことは、そのように歩めば、必ずこの世でもうまく行き、成功するというものではありません。ダニエルは忠実に歩み、責められるべき何の口実も欠点も見出されない人でしたが、この章で罫が仕掛けられます。他の大臣や太守たちがダニエルには何の怠慢も欠点も見つからず、彼がどんどん昇進し、重んじられて行くのを見て面白くなく思った。そこで彼を失脚させるための悪たくみを図ったのです。

大臣と太守たちは王のもとに来て言います。「これから30日間、王以外に祈願してはならないという法令を制定してください。そしてもしこれを破る者があれば、獅子の穴に投げ込まれるものとしてください。」と。これは一見、王のことを思っている言葉のように聞こえます。この王国を一層強化し、より良く統一するための進言に聞こえたでしょう。またこれは王のプライドをくすぐるものでもあったでしょう。しかし実際にはダニエルを滅ぼすための罫でした。敵対者たちはこの法令を制定しても、ダニエルは彼の神、主に祈ることをやめないだろうと確信していました。そんな彼らにとって30日間もあれば十分です。

これはダニエルにとって大変な試練を意味します。彼はこれによって二者択一を迫られることとなります。すなわちこの法令に従い、主への忠誠は後回しにして、この世の命を保とうとするのか、それとも主への忠誠を第一に堅く保って、王の法

令に逆らい、地上の命を捨てるのか。

10節を見ると、ダニエルはその文書の署名がされたことを知って、自分の家に帰って、いつものように日に三度、ひざまづいて祈ることをしたと記されています。彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かって開いていました。ソロモンの言葉（I列王記8章46～50節）に基づいて、同報イスラエルのために日々祈っていたのでしょう。この時もそうだったと思われます。またその祈りは10節最後に記されているように、「感謝」で特徴づけられていました。そしてその中で、今起こった出来事についての導きも祈ったことでしょう。ダニエルは禁令の文書が出たからと言って、それに左右されることなく、主を第一にして歩むことを大切にしました。他のどんなことにも、このことを妨げさせなかったのです。

さて、これはダニエルの敵にとっては思う壺です。彼らは王に報告します。ダリヨスは、しまった！と思ったでしょう。王は何とかダニエルを救おうとし、日暮れまで努めました。大臣たちはそれを許しません。「王よ。王が制定したどんな禁令も法令も、決して変更されることはない、ということがメディヤやペルシヤの法律であることをご承知ください。」と強く迫って来ます。その結果、ついにダニエルは獅子の穴に投げ込まれることになったのです。

結局は敵の思い通りに事が進んだだけのようです。ダニエルの祈りは何の意味もなかったかのようです。悪い方向にだけ事は進んだようです。しかし似たようなことは3章でも見ました。シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの3人は神に第一に従う道を選び取った結果、普段より7倍も熱い火の燃える炉に投げ込まれました。そこでも見たことですが、神は私たちが危険に遭わないように救われるのではなく、そのただ中で救われるお方です。シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは、燃える炎の中で守られました。今回も同じです。ダニエルは獅子の穴に投げ込まれましたが、その中で守られるのです。私達も主に従う道を選んだ結果、一層の窮地に立たされるかもしれません。しかしそれで神の守りは私を離れたと早合点してはならない。むしろその苦しみのただ中で、主は共にいて、みわざを現わしてくださるのです。

さて翌朝、ダリヨス王は日の出と共に急いでライオンの穴へ行きます。そして悲痛な声でダニエルに安否を問うと、何とダニエルは生きていました！21～22節：「すると、ダニエルは王に答えた。『王さま。永遠に生きられますように。私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことはしていません。』」　ダニエルの答えは、神が御使いを送って

獅子の口をふさいでくださったというものでした。そのことについてダニエルは「私に罪のないことが神の前に認められたから」と言っています。ここに今日の章で最も大事な真理が語られています。それは神こそが最終的な裁判官であるということです。人は色々と判断し、断罪するかもしれませんが。しかし人の最終的運命を判断し、決定されるのは主なる神である。22節には、彼が神に「信頼」していからとも言われています。すなわち神に信頼して御前に正しい歩みをダニエルはしていた。それを神が見て判断し、ご自身の目に正しい人を必ず助け出される。一方、神の前で正しくないと判断された者にはさばきが下ります。ですからここでダニエルを不当にさばこうとした人々が逆にさばかれています。不正な証言をして悪を企んだ者は、自分が相手にしようとしていた通りにされるという原則がこの時代にもあったのでしょう（申命記 17 書 16～21 節）。ダニエルの敵たちは獅子の穴に投げ込まれます。するとどうだったのでしょうか。24 節に「彼らが穴の底に落ちないうちに、獅子は彼らをわがものにして、その骨をことごとくかみ砕いてしまった。」とあります。すなわちライオンはお腹がすいていなかったわけではなかったのです。獲物があればすぐにも飛びつく状態だった。ですからダニエルが投げ込まれた時の守りは、本当に奇跡的なものだったと分かるのです。ダリヨスがこの結果、主を賛美した言葉が 25～27 節にあります。かつてのネブカデネザルのようです。そして最後の 28 節に、「このダニエルは、ダリヨスの治世とペルシヤ人クロスの治世に栄えた」とあります。神に従う道を第一に選び取った彼は、このような祝福に浴することができたということが述べられています。

さてここまで読んで私たちは次のような思いを持つかもしれません。この話はこれでいいが、ここからどんなメッセージを語るができるのか。ダニエルのように主に信頼し、主に従うことを第一にするなら、主は常にこのように守り、助け出してくださるのか。中には迫害の中で主に第一に従いつつ、殉教した人も多くいる。その人たちにこの箇所はどう当てはまるのか。また私がもしこのような状態に立たされた時、自分はどうなると信じれば良いのか、と。確かに聖書で、主に従うことを第一にすれば必ず救い出されるという約束はありません。主に従いつつ、不条理と思える扱いを受けた人たちの例はたくさんあります。バプテスマのヨハネ然り。使徒の中の最初の殉教者ヤコブ然り。伝承によればペテロやパウロも殉教しました。歴史の中にもたくさんの殉教者がいます。ですから地上での命がどうなるかということについては、一律の答えはありません。それよりも大事なメッセージとして聖書が述べていること、そして今日の箇所が述べていることは、神こそが主権者であり、最終的な裁判官であるということです。その神はご自身に信頼する者を必ず守

られる。究極的な意味でそれは真実なのです。私たちは地上的な意味で死ぬのか、死なないのかということにこだわり過ぎると今日の章のメッセージは分からなくなります。先に触れたように、多くの殉教者のことを考えれば、地上的なことだけでは判断できないというのが聖書の立場です。神の真のさばきは、この世で完結するものではなく、地上の死の後に最終的に来るものです。そして私たちにとって死は大きなテーマでありつつも、今やキリストにある者にとって何の力も持っていないものです。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」 地上の死はキリスト者にとってもはや害を与えるものではなく、むしろ一つの通過点であり、益でさえあると言われています。その死を越えたところで、神の最終的な正しいさばきはなされるのです。

このダニエルの救出劇は、まさにその死を越えて神がなされる最終的な審判を映し出しているものではないでしょうか。ダニエルがライオンの穴に投げ込まれたことは、ある意味で死に至らしめられたということです。しかしその死の穴から、彼は神によって救い出された。これは主に信頼する者に主が究極的にやがての日に成就してくださる救いを象徴的に表しています。一方、主に敵対する者はライオンの穴に投げ込まれました。これは彼らの地上的な死を語るだけでなく、やがての日に主が行なわれる最終的なさばきも象徴的に示すものでしょう。このことを思うなら、私たちは大変な勇気を与えられます。私たちは自分の地上の生と死がどうなるかということにばかり思いが行くと右往左往しがちですが、今のことをしっかり押さえれば、死を前にしても少しも動じないでいることができる。神の御心によって、そこで地上的な意味で救われるかもしれません。それはそれで神がなお地上でなすべきことを私に残しておられることを意味しますから、私たちはその使命に励むべきです。しかし反対に神のご計画により、地上の命がそこで終わりになっても問題は何もありません。神は私を究極的に守ってくださり、救ってくださいます。それによって私が失うものは何もないのです。私たちはこの神の絶対的な守りを見上げて、ただ神が喜びたもう道だけを選び取って行けば良いのです。

今日は2014年最後の聖日礼拝です。振り返れば今年一年も、この神の主権的・絶対的な守りの中で、ここまで導かれて来た私たち一人一人です。確かに自分に注目すれば、ダニエルからは程遠い欠けだらけ、罪だらけ、不信仰だらけの私たちです。にもかかわらずそこにある小さな信仰を認めて神が守り続けて下さった一年であった。獅子の穴から救われ続けて来た一年であった。いや私は守られているようには思えない。現に今、厳しい苦しみのただ中にいると思われる方もいるかもしれません。しかし今日見て来ましたように、困難それ自体は主がともにいないことを意味

しません。むしろそのただ中に主はともにいて、そこからみわざを現わしてください。ですから私たちは心動じずに、神の主権を告白してこの神に従う歩みを求めて行けば良い。そうする者を神が救ってくださる。この書を読む私たちにとっての励ましは、ダニエルは異教社会のただ中でこのように生きたということです。私たちもこの異教社会で主に従う道を選んで生きようとするなら、多くの困難とぶつかります。しかし私たちは心騒がせず、「人に従うより、神に従うべきです」とのモットーにのみ生きれば良い。そうすれば、すべてを見ている主権者なる神が、私たちを守り、必ず最終的に救い出してください。むしろそのように主に信頼し、従う歩みを通して、ついには周りの主を知らない方々が主を賛美することへ至るように、主は私を用いてくださる。そして私自身を神の御前で真に栄えさせてくださる。この一年の守りを感謝し、新しい年も主こそが主権者であり、さばかれる方であることを仰ぎ見て、心を強くして主に従い、獅子から救われ続け、まことの祝福へと至る信仰の道を進みたいと思います。